（第3種郵便物認可）

また一緒に折り紙を

白峰の豪作家 一夏の教室 最終回

オーストラリア出身で、白山市白峰在住の折り紙作家マイクル・クロナリスさん（五九）が九月の帰国を前に開いていた折り紙教室の最終回が二十六日、白峰の林西寺であった。地元の小学生らが折り紙を楽しみ、別れを惜しんだ。（谷口大河）

マイクル・クロナリスさん（左から２人目）と折り紙の力士を戦わせて遊ぶ児童＝白山市白峰の林西寺で

夏休みに合わせた週一回の教室で、四回目のこの日は児童と保護者ら十二人が参加。マイクルさんからさまざまな折り紙を学ぶとともに、紙箱の土俵を指先でたたいて折り紙の力士を戦わせたり、宙返りする紙飛行機を飛ばしたりした。

教室が終わり、児童全員で「Thank you very much（どうもありがとう）」と伝えると、マイクルさんは「どういたしまして」と日本語で応じた。保護者からは白峰の思い出に、児童による地元の民謡「かんこ踊り」の映像を収めたDVDを贈った。

同市白峰小学校四年の加藤愛楽（あいら）さん（九つ）は「また一緒に折り紙をしたい」と話した。マイクルさんは一夏限りの教室を「とても楽しく、幸福な経験だった」と振り返った。

陸中日新聞　新聞定価 朝夕刊月ぎめ 本体価格3,686円（税込み 3,981円） 1部売り（税込み） 朝刊130円　（第3種郵便物認可）

折り紙でグッバイ白峰

ORIGAMI GOOD-BYE SHIRAMINE

定住の豪作家、帰国前に教室

オーストラリア・シドニー出身で石川県白山市白峰在住の折り紙作家マイクル・クロナリスさん(59)が９月の帰国を前に、集落の児童たちに折り紙を教えている。夏休みの８月、週１回の教室。児童は紙をさまざまに「変身」させる指先を、マイクルさんは子どもの笑みを、瞳に焼きつけている。最後の教室は26日。　（谷口大河）

児童に折り紙を手ほどきするマイクル・クロナリスさん㊨＝石川県白山市白峰で

「inside out（ひっくり返して）」「Remember（覚えてる）?」。二十一日、白峰の林西寺。マイクルさんは六人の小学生と保護者に笑いかけながら大小さまざまの船、メッセージカードを入れられるハート、星形の箱を巧みに折る。

折り紙と出合ったのは一九八四年。シドニーを訪れた白峰出身の永下悦子さんに教わった。二人は八六年に結婚し、折り紙の実演や教室、パーティー会場の飾りつけなどを仕事にしてきた。娘の誕生を機に八八年に白峰を初めて訪れた。「空気と水がきれいで、とても静か」と気に入り、夏休みや正月に長期滞在しスキーや温泉を満喫。約四年前に移り住んだ。

マイクルさんは折り紙の魅力を「リラックスでき、禅の瞑想（めいそう）にも通じる。平面の紙から立体を作れる」と話す。白峰では折り鶴のピアスなどの作品を販売し、住民とゲートボールなどで触れ合ってきた。しかし今年六月に悦子さんが六十七歳で病気で死去。高齢の父親ら本国の家族が気がかりで帰国を決めた。

亡き妻眠る地「また戻りたい」

事情を知った林西寺の前住職加藤宦（まなぶ）さん(七)が教室を提案し、マイクルさんは快諾。加藤さんは「折り紙を通じ、白峰にいた証しを子どもの記憶に残してほしかった」と話す。妻を亡くしたマイクルさんを励ます思いもあった。

八月七日から始まった教室には毎回十～二十人が集まる。二十一日の三回目に参加した白峰小学校四年の織田真君(九)は「いろんな折り方が学べた。英語にも興味が持てそう」、二年の織田千晴さん(八)は「英語はよく分からないから苦手だけど、教室は楽しい」と話した。

「折り紙は子どもたちにとって自らの脳と手に対する挑戦。完成した時の笑顔がとてもうれしい」とマイクルさん。「白峰には妻の墓があり、親族もいる。また戻ってきたい」